

カトリック六甲教会 教会報

2012

6

No.486

みこころ 聖心の月

片柳弘史(助任司祭)

6月はイエスの聖心に捧げられた月です。この月の初めに当たって、もう一度、17世紀に生まれたイエスの聖心の信心の内容を振り返り、その意味を考え直してみましよう。

(1)信心の由来

「イエスの聖心」への信心は、17世紀にフランスの田舎街、パレルモニアルの修道院で起こった出来事に由来しています。マルガリタ・マリア・アラコックという一人の修道女に現れたイエスは、人類への愛に燃え上がるご自身の心臓を彼女に示し、その愛を世界中に広めるよう命じました。それが、聖心の信心の始まりです。

(2)聖心の信心の広まり

アラコック修道女の指導司祭だったイエズス会員、クロード・ラ・ロンビエールの尽力もあり、この信心は当時のフランスで多くの人々から受け入れられました。ロンビエール神父がイエズス会員であったことから、教皇ピオ12世はイエズス会に特にこの信心を世界に広める使命を与えました。数年前、教皇ベネディクト16世も、イエズス会にこの信心への熱意を保ち続けるよう改めて呼びかけられたばかりです。

御出現の際、アラコック修道女にイエスは12の約束を与えました。その中でも特に有名なのは、12番目の約束でしょう。9ヶ月連続して初金曜日に聖体拝領に与るなら、その人は必ず最後に痛悔の心を抱き、秘跡に与ってから死ぬことができるというものです。この約束に希望を置いて、世界中のイエズス会の教会では毎月、初金曜日に特別なミサが行われています。

(3)なぜ聖心なのか？

「とても大切な信心なのはわかるけれど、あの血を滴らせた心臓の絵はちょっと」という方もいらっしゃるかもしれません。なぜイエスは心臓を取り出してアラコック修道女に見せたのでしょうか。

それは、当時のヨーロッパにおいて心臓が心の宿る場所だと考えられていたことによります。イエスは、ご自身の心にあふれる愛を、心臓というシンボルを通してお示しになったのです。

ですから、現代ではあの心臓にそれほどこだわる必要はないでしょう。むしろ大切なのは、イエスの心に燃え上がる人類への愛を思い起こすことです。福音書に記されているイエスの言葉、イエスの愛の業は、すべてイエスの心が口に命じて語らせ、体に命じて行わせたことでした。イエスの心こそ、神の愛そのもの、人類の救いそのものと言っても過言ではありません。イエスの心を思い、そこからあふれ出す神の愛を全身で受け止めること、その愛にこたえて自己犠牲と奉仕の業に励むことこそ、わたしたちにとっての聖心の信心だと思います。

6月15日の「イエスの聖心の祭日」を頂点として、この1ヶ月のあいだイエスの心に燃え上がるわたしたち一人ひとりへの愛を思って祈り続けましよう。

忘れないで

東日本の被災地より（3）

前月号の“忘れないで”東日本の被災地ボランティア体験記を拝読、感動さめやまぬうちNHKテレビで「震災に生きる子どもたち」と題した特別番組が放映された。

それは震災後、避難所生活している子どもたちの特集番組である。朝スクールバスに乗って、避難所から隣町の小学校の借り教室へ向かう子どもたち。一見、何処でも見られる子どもたちの朝の光景である。



ところが子どもたちを乗せたバスは、学校へ行く途中、津波で殆ど元の形を思い出すことも難しい彼らの町の中に入った時、それまでバスの中ではしゃいでいた子どもたちの声が、一瞬に静まり、みな下を向いて本に目を落とした。窓の外は、ガレキの山また山、あの日と少しも変わっていない光景が映された。

そんな自分たちの町を子どもたちは見たくない、あの恐ろしい日を思い出したくなかったのだろう。子どもたちの大半は、震災と津波で親友を亡くした子、家族を亡くした子、家族がまだ行方不明の子たちである。小さな子どもたちだが、お互いにお互いを気遣いながら、それぞれが抱える苦しみ、悲しみを癒すかのように互いに支え合っている。否、そうしなければ倒れてしまいそうになる、今日一日生きていけないことを自覚しているかのようである。

学校ではそんな子どもたちの苦しみ、悲しみからの解放を手助けしたい、何とか彼らの胸の内を開けてあげたいと、担任の先生が毎日子どもたちと真剣に向き合っている。一人の男の子から「僕らはいったいどうなってしまうんだろう・・・」と呟くような不安の声が漏れた。その傍らでは親友をなくした男の子、いつもならサッカーをするのが大好きだったのに、体調が悪いと言って、サッカーをしなくなった。もう一人の女の子は、大好きだった母親が津波で流されたまま行方不明、この現実を受け止められず、母の帰りを待っている。

そんな子どもたちが、ある日、彼らの恐れていた海にみんなで行った。海岸の突堤に腰掛けて一人の男の子が言った「鳥はいいよね。好きのところへ飛んでいけるから・・・」。

もし、この子どもたちの傍にいたら、この言葉をどのように受け止めますか？若干、12歳の小学校六年生の子どもたち。12歳で人生の大半の苦勞を背負った、否、背負わされた。その彼らにどんな言葉をかけられますか？

ある高齢の方から「人生って誰でもこんなもんだよ。大変な苦勞や悲しみの連続なんだよ」と平然と口から洩れた。そんな通り一遍の言葉は、悲嘆の真只中いながら一所懸命生きようとしている子どもたちに届けたくない。こんな言葉しか出てこないから、今の世の中殺伐としていくのではないだろうか。もっと人として、温もりのある言葉が、相手を気遣う思いやりの言葉がないのだろうか・・・。

次にテレビは、福島県相馬市の小学生にカメラが向けられた。津波の被害は免れた。しかし、

地震で学校の校舎は大きな爪痕を残し、放射能という目に見えない恐ろしい被害を受けている。体育館は使用不可、校庭立入り禁止、放射能が降注ぐから控えるとのこと。

教室の中はといえば、多くの生徒が他府県に転出していった。そのため教室はガランとしている。それでも登下校の為にスクールバスは準備され、子どもたちの送迎をする。その理由は、放射能汚染のガレキの中を通うのを避ける為と、子どもたちに恐怖感を与えない為である。

放射能の影響の為、二週間遅れで新学期が始まった。子どもも先生も久しぶりの再会である。しかし、登校してきた子どもたちは、すぐに淋しさを感じた。それは放射能の被害によって、お友達がバラバラになったことだ。また新しく転校してきた子どもは、原発のすぐ近くの町から転校してきた。この子どもは、生涯自分のいた学校にも住んでいた家にも戻れることはない。更に、そんな淋しい新学期を向かえた子どもたちに、追い討ちをかけるように津波で亡くなった友達のことが知らされた。

重い空気の蔓延した教室に、登校してきた子どもたち全員集まり、話し合うことから始まった。そのとき一人の男の子が、おなかが痛いと言って泣き出した。この男の子は半年前まで地域のバレーボールのメンバーとして大活躍。地域の選抜を勝ち抜き、全国大会への出場を決めた立役者の一人である。そんな運動好きだった男の子が体調を悪くした。それは仲良しのメンバーの5人が引越し、バラバラになってしまったからである。当然のことながら練習どころか、全国大会出場も難しくなったことで深く落ち込んでしまった。彼を癒せるのは、友達しかいない。その友達はいつ戻れるのだろうか・・・。

「鳥はいいよね。飛んで逃げられるから・・・」

被災地の子どもたちのこの現実を、どのように受け取りますか。私たちのできる可能なこと、それは「祈り」です。

「祈り」は必ず彼らの心に届きます。思慮分別のない発言は謹んで、ただ彼らの心の支えとなる「祈り」を届けましょう。

主任司祭 松村信也



東日本大震災ボランティアを体験して

5月3日から6日まで、イエズス会の柴田潔神父、中井淳神父をはじめとする5人の司祭・修道者が引率するボランティアに参加しました。30名ほどのグループは、カリタスジャパンの石巻、米川（南三陸）、大船渡、釜石、大槌の5つのベースに分かれてゴールデンウィーク期間中、ボランティアをしました。私は、柴田神父とともに大槌ベースに割り当てられました。

私の訪ねた期間は天候が非常に悪く、特に5月4日は被災後最悪の大雨でした。町は地盤沈下しているだけでなく、津波の土砂が側溝に詰まり、町の排水機能が失われていたため、行き場を失った雨水が町にあふれていました。5月4日の予定は当初、漁協まで行ってワカメの選別をしたり切ったりする地元の漁業をお手伝いする予定でしたが、道路冠水のため、行くことができず中止。かわりに近くのコンビニエンスストアの水のかき出しなどを行うことになりました。そのコンビニは、大雨の影響で雨水が浸入しており、店内の販売スペースからトイレ、倉庫に至るまで水浸しになっていました。商品を濡れた段ボール箱から一つずつ商品を丁寧に取り出し、水のかからない場所に移したり、店内に土嚢を積む作業を行いました。翌日の5日は、内陸の農家に行き、小さな苗を植え替えたりする作業をお手伝いしました。また、空き時間には車で山田、宮古などの被災状況を見に行ったり、大槌町を実際に歩いて回ったりしました。今回の被災地訪問で私が特に印象に残ったのは、雨水のあふれかえった夜の大槌町を歩いたことです。大きな水たまりがあちこちに存在し、水たまりを避けるために道路を歩いたり、津波で流された住居跡を歩

いたりしなければなりません。また、よほど注意していないとつまずいたり、側溝に足がはまってしまったりします。真っ暗な町を歩くのは本当に危険だと感じました。また、大槌町には海沿いに多くのがれきが処理されずに積み上げられています。また、土台から上が流されてしまった家もそのままです。

「ボランティアに行ったら、とにかく頑張るぞ！」と張り切って行きましたが、思ったことはほとんどできませんでした。しかし被災地で私が見たものはテレビで見たのとは全く違う現実でした。そして雨水のあふれた被災地を歩くという体験は忘れられないものになりました。今回の体験を通して、被災された方々の痛みを少しでも引き受けることが大切だと実感しました。それはとても難しいことではありますが、私たちがこれからも被災地に目を向け関心を持ち続けること、継続的に関わり続けること、被災された方々に寄り添うことだと思います。

震災以降ボランティアをしたいと思いついて、1年以上経ってようやく今回初めてすることのできたボランティア。私ははじめの一步を踏み出すことができたことに感謝します。（佐藤）

神父様方のメッセージ「忘れないで」に加え、信徒の方々の復興支援の取り組みを取り上げていきたいと思っております。ご自身の活動、被災地にいらっしゃるお知り合いの様子など、お寄せください。（広報部）



節電のお願い

関西電力から、この夏は電力不足が予測されるので、15%の節電協力のお願いがきております。

当教会においても下記の項目についてご協力ください。

1. 冷房温度は27℃に保ち、大きな電力を使う「ドライ」運転はやめましょう。
2. 照明はこまめに消しましょう。

特に人気のない部屋の空調、照明には気をつけて下さい！！

灘北2地区 及び 阪神ブロック 地区会のお知らせ

—— 片柳神父さまとともに ——

日時： 6月17日(日) 11時15分～12時15分

場所： 六甲教会 第1・第2会議室(2階)



久しぶりの地区会です。
皆様にお目に係れますのを楽しみにしております。
ご家族の皆様と一緒に！

灘北2 藤井・飯塚・春野
阪神ブロック 小林



壮年会総会 懇親会報告—六甲の花園—

4月22日(日) 壮年会総会、懇親会が開催されました。昨夜来の雨もあがり、春の暖かさとともに、昨日は二十四気節の「穀雨」ということで、まさに天地が潤い、木々の若芽がまぶしく感じられる一日でありました。いつまでも早春の若芽のような当教会壮年会の面々が21人参集、松村神父、コリンズ神父もジョインされ、テーマ「六甲教会今昔」を中心に、それぞれ六甲教会との縁、信者になった動機、キッカケ等のスピーチで盛り上がりました。実にさまざまな動機があることに驚くとともに神の神秘的、偉大なご計画、構想を改めて認識させられ、正に我々の肺腑を突くものでありました。

昔、当教会におられたフォーブス神父が、当時(小生が高校生のころ)「人間社会を多くの切子面をもつダイヤモンドに例え、その一面一面の輝きの多様性が統合された時の美しさ」を語っておられたことを思い出しました。

会場では、井川会長ほか幹事の方々のグッドマネージメントにより、美味しいワイン、持ち寄りの料理、楽しい会話で大変盛り上がった会になりました。

小生はこの壮年会を「六甲の花園」と例えたいと思います。ここは実にいろいろな草木、花等で構成された花園です。しかも単なる桃源郷のようなものではなく、「花園は蜂がとんでいなくて花園ではないのよ！」(アリス ワンダーランド)という「蜂」も確かに何匹か存在する。蜂がブンブンしていることで、はじめて花園を構成する美しい花々も美しく香り高く昇華される。今後ともこの花園がうまくメンテナンスされ六甲教会の司牧に貢献できればと思った次第でありました。
(船井)



ヤッホー会

5月4日(金) 久しぶりにヤッホー会が再会しました。片柳神父様をはじめ青年&自称青年合わせて12名が六甲教会に8時30分に集合しました。



今回は少し挑戦して六甲山頂近くを通り、有馬温泉まで下るコースでした。六甲山頂ケーブル下から階段状のきつい「油こぶし」という山道に入りました。歩いている途中、緑の中に包まれ、気持ちいい風が吹き爽やかに感じました。新緑の木々の間から神戸の街と海が見えてきて、その方向に向かってみんなで恒例の”ヤッホー”を思い切り叫びました。六甲山の大自然の中で私たち12人が蟻のようにゆっくり歩いているんだなあと思いました。歩いている途中、名も知れぬ美しい花をたくさん見つけました。山頂ケーブル駅付近でお弁当を食べたあと、神戸ゴルフクラブの中を通り抜け、ガーデンテラスの前を通り、有馬まで下りました。有馬に着く少し手



前で、鼓ヶ滝に辿り着きました。滝の水の音で身も心も癒されました。有馬ではみんなでゆったりと温泉につかり、6時間近くも歩き続けた足を休めました。ヤッホー会の最後はみんなで打ち上げをして家に帰りました。今回のヤッホー会で、山登りは達成感が感じられ気持ちいいなとあらためて感じました。(井川)



オルガンメディテーション

パイプオルガンが東梅田教会より移設されて2年目の聖霊降臨を迎えました。

オルガンは六甲の聖堂になじみ、また会衆の歌声と一体になり、ミサや結婚式など様々な場面でなくてはならない存在となってきました。2回目の復活節を終えましたが、会衆の賛美の歌声は、オルガンの響きに高らかにまたあるときには荘厳に導かれ、会衆と音楽の一体感を感じます。

オルガンの設置以来、オルガンチームの企画のもとで、オルガンメディテーションを行っています。「クリスマス音楽の集い」、復活の主日のミサ後に行った「イースターチャント」にはそれぞれ約150名程度の教会内外からのご参加をいただきました。単なる音楽を鑑賞する会ではなく、聖書の場면을朗読と音楽によって味わう、教会ならではの内容が好評です。イースターチャントでは、「復活の続唱」を聖書朗読とともに、グレゴリオ聖歌、メンデルスゾーン、そして高田三郎作曲の典礼聖歌と様々な時代の音楽で演奏しました。ラテン語や日本語様々な言語でしたが、聴きに來られた信者の方からは、聖書の場面がとてもよくわかったという声、未信者の方からは音楽から聖書に興味をわいたという声もありました。

また、イースターチャントでは東日本大震災募金にもたくさんのご協力をいただくことが出来ました。復活祭は喜びに溢れたバラエティ豊かな構成になりましたが、8月15日の被昇天祭のメディテーションではオルガン演奏中心の企画をしております。本来メディテーションとは瞑想という意味です。今後もオルガンは様々な場面で教会を支えてくれることでしょう。今後も皆様のご協力をお願いします。(オルガンチーム 清水)



すべては“今”

2009年4月に出発した聖書通読の旅は、3年1カ月の長い旅路を終えることができました。今年5月7日、私たちは共に集まって感謝の祈りを捧げた後、松村神父さまから一人ひとり修了証をいただきました。誰の顔も、達成感の喜びと感謝で輝いていました。みんな、共に歩む仲間達がいたからこそ続けられたのだと今更のように感じています。

私たちは、知らないうちに、一人ひとりのうちに住む聖霊に導かれながら成長してきたことにだんだんと気付かされました。それには、やはり3年という時の幅が必要だったのかもしれませんが、今、振り返ると、この旅は決して楽なものではありませんでしたが、お互いの分かち合いを評価せずにただひたすら聴き合うことを、毎回繰り返しているうちに、心の中に変化が出てきたように思います。それは、一人ひとりへの尊敬が次第に生まれてきたことでした。でも、それが真実なものになるには3年かかりました。実際には、いつも易しいことではありませんでしたから。

更に、この体験は思いがけない気づきを私に与えてくれたことでした。旅の終わりごろになって、一人ひとりへの尊敬は、私自身への尊敬に向けられたことでした。それは私にとって新鮮な気づきでした。本当に、今、あるがままの私を尊敬できなければ、どうして、今、目の前にいるあるがままの一人ひとりを尊敬できるのでしょうか。この気づきは、貴重でした。

神のみ手は、私たちの旅路の最後に「ヨハネの福音書」を置かれました。私たちは、他の福音書と次元の違うようなこの福音書を読み始めて、初めはみんな戸惑いを隠せませんでした。でも忍耐して読み進むうちに、通読の最後に「ヨハネ福音書」が置かれたことに、神のみ手の計らいを知ったのでした。

ヨハネの“時”は不思議な時です。死も、復活も、昇天も、聖霊降臨も、すべてが“今”です。

主よ、この3年1カ月の間、あなたのみ手の中で、
いくつもの時が過ぎ、・・・時が来て、すべてが“今”になりました。
どうぞ、今日も、み言葉の糧をお与えください。
今日出会う誰かと、いのちの言葉を分かち合うために。

感謝のうちに

Sr. 出口



《各部だより》

三日月会

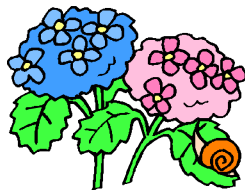
6月18日(日) 例会

中高生会

6月16日(土)～17日(日) 錬成会

教会学校

6月30日(日) 教会学校リーダー研修会



典礼部

典礼奉仕者の集い

テーマ：「信仰年」(2012年10月11日～)について

・6月16日(土)10時～ 片柳神父様

・6月24日(日)13時半～ コリンズ神父様
(第1、第2会議室)

社会活動部

6月 1日(金) 社活連絡会 10:00 ミサ後

施設管理部

6月24日(日) 施設管理部部会

《お知らせ》

★ 小教区評議会 ★

6月12日(日)10時ミサ後、大聖堂で「小教区評議会年次報告会」が開催されます。教会の財務報告、小教区評議会の会計報告、地区会の報告など重要な報告が行われますので、多くの方の参加をお願いします。

★ 養成部 ★

祈りの道場

日時：6月30日(土) 10:00～14:45 15:00～ミサ

指導：英 隆一朗神父

場所：カトリック六甲教会主聖堂

参加費：600円(昼食代)



祈ってみませんか？

「思わず天に祈った」という経験は、皆が持っていると思います。一方で、「祈ってもその通りにはならない」、「祈るのは弱い人間だ」、「科学がこんなに進歩しているのに、今さら祈りでもないだろう」、と無神論者を装う人も多くいます。しかし、考えて見れば人類は大昔から、日照りが続けば「雨を降らせて下さい」、嵐が来れば「鎮めて下さい」等々、ずっと祈り続けてきています。

そうであれば、「祈る」ことは、「生きる」ことであり、「息をする」ことであり、「いきいきと生きる」という基本的に人間に備わった自然本性の現れではないでしょうか。鳥が空を飛び、魚が水中を泳ぐのと同じで、持って生まれたごく自然な行為ですから、この世に祈らない人間はいないはずだと考えます。「祈るほど困っていない。祈らなくても済む。」というのは、それはそれでいい事なのかも知れませんが、それは一時的な物質的、経済的な豊かさでしか過ぎません。長い人生で、「祈らなくて

済む」はずはないと思います。希望や願い（ご利益含め）を祈願するだけでなく、感謝、愛、思いやり、従順、誠意、畏敬のためにも私達は祈ることが出来ます。「祈り」は、神への語りかけを繰り返す、神とのコミュニケーションだと考えます。

「祈り」によって、頭では理解できないけれど、「心に響いてくる何か」、「神秘的な何か」を感じることもあるかも知れません。一人でも多くの人たちが、祈ることの大切さを見出し、祈りの意義に気付いていただければ幸いです。（参照：「人は何のために祈るのか」、村上和雄、棚次正和著、祥伝社）
(養成部 K. M)

★ 社会活動部より ★

6月6日(水)10:00 手芸の集い(第1・2会議室) どなたでも参加できます。

9日(土)10:00 炊き出し(イグナチオホールお台所)小野浜グランドへ移動。
配食や小父さんたちのお話し相手だけでもOKです。

17日(日)10:00 ミサ後 ふれあい広場(イグナチオホール)
手作りコーナー、有機野菜、東北支援等。

25日(金)9:30 ともしび(イグナチオホールお台所) ケーキづくり

★ 墓地委員会より ★

6月2日に墓地の管理費2の請求書を郵送いたしました。請求書には郵貯の振込用紙が付いていますのでそれを使用してください。予め請求金額が記載されていますので、その金額を振り込んで下さい。

前年度分の振込金額が請求金額と差があったものについて、その差額分の増減をしてあります。更に、前年度未払いの場合、未払い分が今年の方に加算されています。締切日は6月30日です。振込料は不要です。名義人変更、住所変更、コメントなどのある場合は、振込用紙の余白をご利用ください。

墓地委員会 SF



みんなの広場

松下まやさんを偲んで

佐久間

松下まやさんの46年の生涯の中で私との接点はわずかに2回だけです。その1回目は35年あまり前、まやさんが小学校3年生の時でした。私は当時大学生で、教会学校のリーダーをしており、3年生クラスの担当として毎週土曜日まやさん達に神さまのお話をしていました。私にとってこのときのクラスの子ども達と過ごした一年間は本当に楽しく幸せなものでした。「リーダー、

もっと神さまのお話をして。」「リーダー、もっと歌を歌おう。」「リーダー、一緒に遊ぼう。」子ども達がこう言いながら私のまわりに集まってくるのです。その中の一人がまやさんでした。

2 回目の接点はまやさんが亡くなる直前でした。まやさんは自分の余命があと数ヶ月とわかっており、最後に会って話をしたいと私と呼ばれたのです。私がお会いしたのは亡くなる前の週と前日の2回だけ、お話ししたのも5時間あまりでした。

私とまやさんとの接点はこの2回だけ、しかも間に35年という「空白期間」があります。それでも私はその2回の出会いを通してまやさんの生き様が35年間ずっと変わっていなかったのではないかと感じさせられました。死が近いことをわかっている人がこれほどまでに前向きで明るく、まわりの人に平安をもたらすことができるのだという、このときの体験は私にとって一生忘れることができないでしょう。

まやさんが亡くなる前日は日曜日で、私は御聖体を持って病院に行きました。私とその日の福音を朗読してからすぐまやさんに御聖体を授けようとする、まやさんは今読んだ聖書の箇所を解説をして欲しいと言いました。私は心が乱れてしまい、六甲教会で初聖体式があったこと、御聖体をいただくことによって復活をされたイエス・キリストが今も私たちとともにおられる、とこう言うのがやっとでした。するとまやさんはさらに教会のミサで神父様がどんな説教をしたか教えて欲しいと言われたのです。まやさんはその生涯を通じて新しいこと、わからないこと、ほかの人々の自分と異なる考え方をどん欲に吸収していかれたと思います。そしてそれは単に学問的な知識だけではなく、神さまについてもっといっぱい知りたい、そう願いつけてこられたと思います。人はまやさんのことをとても聡明であったと言うでしょう。でもまやさんは自分はまだ知らないことがいっぱいあるのだという謙虚さを持っておられたのです。

「自分は人生に何も思い残すことはない」穏やかな口調で自分に言い聞かせるように話されたまやさんは、最後の最後まで自分のことよりもまわりの人ことに気配りをしておられました。進行が非常に速いがんが冒されたまやさんがもう病院での治療が不可能と言われ「ホスピス」に移られるとき、看護師さんたちが総出で見送ったと言います。46歳という若さで、自らの死が近いことを告げられたまやさんが、看護師さんたちにいつも感謝の言葉をかけ、常におだやかに病室で過ごされていたことが病院の人々に深い感動を与えたのです。人はまやさんのことを平和をもたらす人であったと言うでしょう。聖書中で「平和」とは欠けたことがない状態のことを言います。もちろんまやさんにも不完全なところがあったでしょう。でも復活されたイエス・キリストがまやさんとともにおられたと私は信じています。そしてそれゆえ私はまやさんが本当の意味で欠けるところのない真の平和をもたらす人であったと思います。

まやさんはその生涯を通じてずっと信仰を持ち続けられました。海外でも教会のミサに参加され、信徒同士のつながりが外国生活の支えとなったと話されていました。そして自分の病気と真正面から向き合い、死を前にしてもその信仰は少しも揺らぐことはありませんでした。人はまやさんを強い人であったと言うでしょう。たしかに病者の塗油の秘跡を受けるため本人が一人で直接教会に神父を訪ねていったというエピソードはまさにまやさんの「強さ」を物語っています。しかし同時に秘跡を受けるとき神父様に自分がこれからどうなるのかという不安な気持ちも持っていることを同時に伝えておられたと聞いています。私はまやさんの「強さ」は復活されたイエス・キリストがともにいて下さるといふ揺るぎない信仰からきていると思っています。

35年前私が教会学校のリーダーでまやさんはクラスの生徒でした。しかしまやさんは46年の生涯を全速力で駆け抜け、今や私を追い越して先に天国へ召されていきました。私には35年後の今、立場が逆転して、まやさんがリーダーで私とそのクラスの生徒になったような気がします。それゆえ私はまやリーダーにずっとこう話すのです。「もっと神様のお話をして。」「もっと神様を賛美する歌を歌おう。」「みんなと平和になかよく遊ぼう」と。

テレジア 松下 まや 4月16日 帰天 46歳

ヨンパルト神父様 天国へ

鈴木

4月24日、メールでヨンパルト神父様御逝去のお知らせが入った時、「あ〜、もう数日待つて下されば、最後にもう一度お会いできたのに・・・」と残念な思いが走りました。

と言うのは、東京の息子の家に行く時には、必ずヨンパルト神父様を主人と二人でお尋ねする事にしており、この度も四月末の連休に息子の家に行く為にと切符を買っておいたところでした。

ヨンパルト神父様には、2001年4月から2005年7月に教会を去られる迄、「スペイン語を学びながら、神父様のお話を聞かせていただける」という恵まれた講座でずい分お世話になりました。予習が大変でしたが、とても楽しいクラスでした。

元々、背骨の調子が良くないご様子でしたが、それがだんだんひどくなり、2004年1月にスペインに帰られ、手術を受けられたのですが、その手術時に患部にウィルスが入り、1か月後に再手術となり、ある程度良くなられ、日本に帰って来られました。その後も二度に亘りスペインへ治療に行かれましたが、結局、手術不可能となり、痛み止めを飲む以外方法がなく、一日に三度痛み止め薬を飲み、夜休まれる時もベッドに寝ることができず、うつぶせに椅子にもたれて休まれるとおっしゃっていました。

その様な痛みには耐えなければならない日々でありながら、「神は又、私に沢山の楽しみを与えて下さった。信仰家のための修練の仕事や、法律のテーマについての講演、中でも執筆の楽しみ、これは時には寝食を忘れる楽しみです」と言われるお姿には、唯々頭の下がる思いでした。しかし最近では「私は我が国・日本から天国に行く事だけを願っています。あの六甲のスペイン語のクラス、日曜日の六甲教会のミサなどは、とても懐かしい思い出です。過去の夢です。できれば2〜3日だけでも六甲に行って、皆様にお会いしたいです」など折にふれ、しばしば“天国”という言葉がユーモア交じりに使われる様になり、お辛い毎日が偲ばれ、心が痛みました。

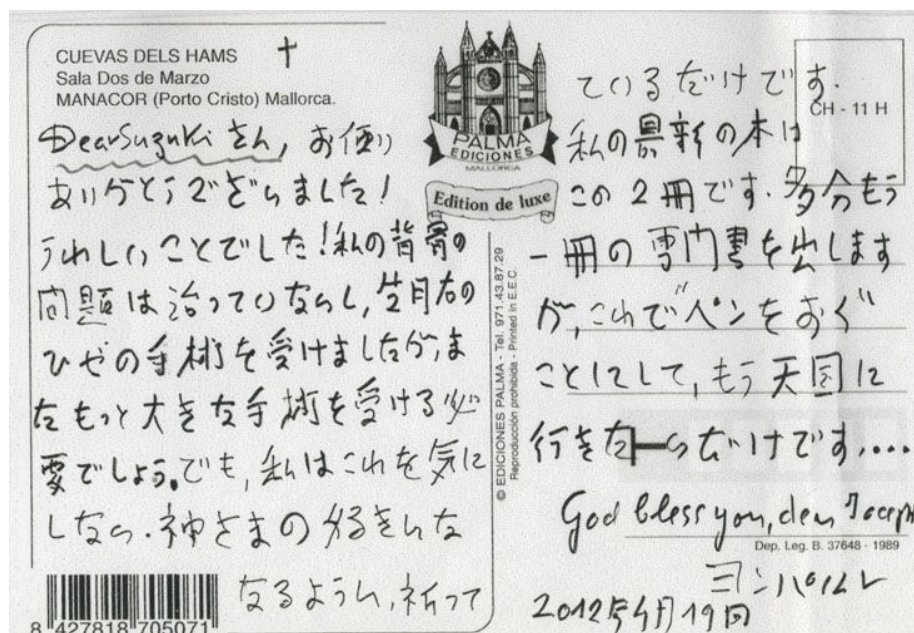
せめてご遺骨にだけでも手を合わさせて頂きたいとイグナチオ教会に参りましたが叶いませず、御聖堂でお祈りだけさせて頂きました。事務所の方にお聞きしましたところ、ヨンパルト神父様は亡くなられる数時間前迄、他の神父様とお話をなさっていて、その後、どなたかがお部屋に行かれた時には既に亡くなっておられたとの事で、「最後はお楽でしたよ」とおっしゃって下さったのがせめてもの慰めでした。

やっと背骨の痛みから解放された神父様、どうぞ憧れの天国で安らかにお休みください。そして私達の為にお祈りくださいませ。

広報部員のつづやき

今月は、身近な、旅立られた方への思いを広場にご寄稿頂きました。

ここに、信徒の方に宛てられた、ヨンパルト神父様のお手紙をお預かりしました。懐かしい、そして変わらない、可愛らしい文字です。日付が4月19日となっています。



文章中にある最新本の発行を通じて知り合われた方に洗礼を授けられたお話も伺いました。

『「笑う」と「考える」・「考える」と「笑う』』（聖母文庫）が最新本のタイトルです。

6月16日に、六甲教会において追悼ミサが有志の方で捧げられます。もう一度、ヨンパルト神父様に出逢えることでしょうか。どうぞご参列ください。

今月は多くの原稿をお寄せいただきましたが、誌面の都合で調整いたしました。

次回以降に掲載させていただきます。申し訳ございません。

★い★

教会報7月号の発行は、7月1日（日）です。

編集会議6月24日（日）です。

記事原稿は、6月17日（日）正午までに信徒会館受付へご提出願います。（広報部）

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ	ト	リ	ッ	ク	六	甲	教	会
〒	6	5	7	-	0	0	6	1
電	話	0	7	8	-	8	5	1
F	A	X	0	7	8	-	8	5
発行責任者	松	村	信	也				
編集	広	報	部					